

特別寄稿

—変化する社会状況の中で、看護の将来を担う看護専門職の育成を願って—

Special contribution

I hope to foster promising nursing specialists in a changing society.

大阪医科大学附属病院 看護部長・臨地教育教授
西山 裕子

Hiroko Nishiyama, RN
Visiting clinical nursing Professor
Director of nursing, Osaka Medical College Hospital

大阪医科大学は1927年の創設僅か2年後に、大阪高等医学専門学校附属看護婦学校を設立しています。このことは当初より医学と看護の両輪での医療教育を目指していたことの証しでもあります。昭和20年代には看護大学構想もあったと聞き及びますので、現在看護学部で実践されている「医看融合教育」の発想は既にあつたのではないかと思います。このことが実現すれば、日本国内において最初の看護大学が行われたことになります。残念ながら実現には至りませんでした。先見の明を持ち、看護の有り様を構想しておられた先人たちの崇高な思いに、本学の看護教育に対する誇りさえ感じます。

附属看護婦学校（後に大阪医科大学附属看護専門学校）で基礎教育を終了した卒業生の多くは、附属病院で智慧・技・こころを備えた看護実践力を修得し、日本国内のみでなく国外でも様々な活躍しています。本年完成年を迎えられた看護学部の1期生の半数の方々も、同様に附属病院で臨床家としての一歩を踏み出されました。入職後半年経過致しましたが、お一人おひとりが目指す看護へと日々懸命に取り組んでおられ、その姿は時には頼もしささえ感じております。林優子看護学部長が掲げておられる「実践重視の看護学教育」は、近い将来確実に花開くと確信致します。本年4月に開設された看護研究科博士課程、前期・後期課程には、附属病院看護部の中からも3名の者が入学致しました。就学に当たっては長期履修制度等、大学からのご支援も頂き、社会人としての学びを進めております。個々の看護実践者としての経験に理論的な裏付けを構築していくことで、高度実践看護師へと成長・発展してくれるものと期待しております。同時に臨床教員規定を策定頂き、7名が臨地実習教授・准教授・講師の称号を付与されました。「実践重視の看護学教育」は、実践の場である臨床の教育環境が大きく影響与えるものと考えます。教育調整会議基盤に、今後更に看護学部と看護部との連携を強化発展させ、望ましい教育環境の提供を充実させていきたいと存じます。また既に部署の枠を超えての人材活用として、講師やファシリテーターとしての相互の教員派遣、学生の卒論や学部教員の研究フィールドの提供や研究共同、学部教員の方々の特性を活かす場としての看護外来の開設等々、互いの強みを活かした様々なコラボレーションが開始されております。今後更に多彩な看護学部と看護部のユニフケーションの展開を図ることで、大阪医大の看護力が発展していくものと確信

いたします。

看護を取り巻く環境は、社会状況や制度改革の影響を強く受け、基礎看護教育制度や継続教育制度、看護職の裁量権の拡大等々変化を余儀なくされています。世界一の少子高齢化の急速な到来を受け、財政的制約のために深刻な超高齢化社会の状況乗り越えるべく、国は社会保証制度改革を推進しています。2025 年に向けて保健・医療・介護・福祉と生活の連携を密にした、「地域包括医療ケアシステム」が策定されました。住民が住み慣れた場所で安心して生活出来るように QOL の向上を目指し、治療だけではなく、保健サービス、在宅ケア、リハビリテーション、福祉・介護サービスのすべてを包含し、施設ケアと在宅ケアとの連携及び住民参加のもとに、地域ぐるみの生活・ノーマライゼーションを視野に入れた、全人的医療ケアが展開されます。このような状況の中で大学教育を基盤とし、地域に根差し、安心と安全、信頼と納得の得られる特定機能病院に相応しい医療サービスを提供することが不可欠となります。また地域ネットワークの拠点としての役割を果たすことこそが、今後求められている役割であると考えます。同時に既にアメリカでは始まっていると言われる看護師過剰時代を視野に入れて、その時代が到来しても必要とされる看護師の育成を重視していく時が来ていると捉えています。

看護基礎教育で、次の三つの側面を重視する必要があると言われています。一つは人格陶冶の教育であり。チーム医療の中でコミュニケーションを図ることができる人間性の育成であります。二つ目は、知識や思考力を培う教育であり、生活体としての対象を患者の個別性を捉え、アセスメントする能力、特にフィジカルアセスメントの能力の強化や予防的視点や地域ネットワークの視点が重要となります。三つ目は、日々進歩する医療の中で安全性を確実に提供するために必要な、与薬、注射、点滴、医療機器の取扱い等に関する技能教育であります。

看護専門職教育は、卒前の学部教育から始まり、卒後生涯にわたりキャリア形成をサポートするための長期的ビジョンを必要とします。医療は医師のみでなく医師と協働して医療を提供する、看護師を始めとしたコメディカルを含めた包括的な教育が不可欠となります。こういった視点に立って、医療総合研修センターの機能をすべての医療人育成のためのセンターへと拡大することで、総合的な観点から臨床教育、「医看融合教育」の完成へと繋ぐことができると考えます。同じ場所で相互に学び合いながら、互いを理解することのできる専門職連携教育（Interprofessional Education）は、今後更に求められるチーム医療を実践するとき、其々の専門性を認識し合い平面的な立場で、的確な役割分担と主体的でスムーズな連携を可能とし、互いの専門性をより発揮することに繋がります。そのことは専門家としてチームワークを築き、様々な場において安全を確保し、対象の多様なニーズに応える医療の質を高め、効率的な質の高い確実な成果を齎す、よりよい医療を実現することに繋がると考えます。チームの中核としてコミュニケーション能力を発揮し、様々な能力や役割を持つ人々をコーディネートして、リーダーシップを図ってマネジメントしていく役割を担うためには、自分は他の人とは違うという自我の意識を持ち、それでいて自分勝手にはならず他人の自我をも認め、看護専門職として社会の中で規律を守って役割を遂行するという、人格陶冶の教育にも繋がっていくと考えます。

看護専門職として自律した活動を展開するためには、健康のあらゆるレベルの問題に対応できるEBN(Evidence Based Nursing)と実践力が必要であることは言うまでもありません。臨地実習の場で学部教員と臨床指導者が其々の強みを活かして協働することで、理論と実践の統合を図り、ロールモデルを示すことができます。このことは様々な看護サービスの分野で、実際に看護実践できるという本来の看護教育のゴールの達成を可能にできると考えます。同時に教育に関わる者も、継続的に自己の課題に取り組み自己研鑽することができるためのシステムも必要であると考えます。臨床指導者の学部講義の聴講や研修会の参加や、学部教員の臨床実践力の維持向上のための臨床現場での研修等々、ユニークに発想し展開していくことが、より質の高い教育提供へと繋がると考えています。

対象となる様々な人々が暮らす場で、自己の責任において自ら考え、倫理観に基づいて判断、行動でき、使命感を持って看護の役割りを遂行し、社会を切り拓くことのできる自律した看護リーダーの育成は、社会が今後更に求めるところとなります。知識や技術だけでなく、メイヤロフの論じる「ケアリングとは、一人の人格をケアする、最も深い意味で、その人が自己成長すること、自己実現することを助けることである。そのうえで、他者が自分を必要とし、それに応えることでその他者が成長することを、自分の喜びとし、ケアする人も成長することである。」という精神を基盤とし、「看護とは何か」「看護の役割りは何か」を常に謙虚に問い続けることのできる、専門職としての人格教育を重視していくことが重要であり、教育に関わる者は常にこのことを認識し、共に学び続ける姿勢を保持することが、真の看護教育であると考えます。

基礎教育は、教育を受けた者の基盤となりその後の活動に大きな影響を与えるということとは、強く感じるところであります。大阪医科大学の看護教育が発展し続け、卒業生が大阪医科大学で学んだことを誇りとし、将来の看護を担う看護専門職となるために、基礎看護教育とそれに続く一貫した確実な継続教育、学び続けるための生涯教育を支援展開することこそが、変化する社会状況の中で必要とされる看護専門職の育成であると考えます。そのために大阪医科大学の歴史に培われた風土の中で、看護学部との連携協働を更に強化していきたいと存じます。そして、大阪医科大学の「学を離れて医はない」の建学の精神を礎に、「国内外問わず如何なる地域においても活躍できる医療従事者を養成する」という目標が、時代や場所を超えて看護の翼を大きく広げ羽ばたくことを願っております。